

忽ニ愈一是ヲ吞或ハ浴メレバ白髪モ黒クナル、ヌケタル髪モ再生ス、眼睛モ明ニナルトイヘリ、
 天皇此所ニ行幸ナリテ、此泉ハ老ヲ養フベシト宣フ、卽年號トス、養老ノ瀑トハ是也ト云々、

〔木曾路名所圖會〕養老瀧 多藝郡多度山にあり、高七丈餘、樽井南宮より南二里許、中略

それ此瀑布はいにしへより名高く、代々の天子もこゝに行幸し給ふ事舊記に見ゆ、道は垂井の
 南宮を去る事二里許にして、一都會の地あり、これを高田といふ、それより山路にして登れば、養
 老亭てふ所ありて、山間に風流の樓を建て、其傍に浴室ありて、入湯の人、養老水を湯にしてこゝ
 に浴し、老をやしなふの謂なり、また徒然なる時は、妓婦出て箏を弾き、三弦を鳴らして宴を催す、
 それより養老の祠あり、こゝより岨づたひにして、溪河を越、石を傳ひ嶮に登りて瀧を見る、其音
 遠近にひびきて潺湲たり、山を多度山といひ、瀧の流れを田跡川と云、又瀧のほとりに信夫石と
 いふ名石出る、石面に垣衣草の摸形あり、又根芹此所の名産也、他境に勝れて香強し、眞に范希文
 が瀧の詩に、白虹澗を下つて飲といひしも、これらにや比せん、名にしおふ此國第一の名どころ
 なるべし、

阿彌陀瀧

○按ズルニ、養老瀧入事ハ、宜シク泉篇醴泉條ヲ參看スベシ、
 〔阿彌陀瀧遊覽記〕文政五年の秋八月、美濃國郡上郡なる前谷村の阿彌陀瀧を遊覽せんと思ひ
 立、中略二十九日晴、朝五ツ比、經聞坊を立て、長瀧寺の境内より東へ曲り街道へ出、川水の音を聞

ながら行、中略倒れたる朽木をのりこへ、木の根に取付草を押分、岩を傳ひ、又行事四丁許、稍にし
 て瀧の邊りに至る、瀧高さ百間ばかり、飛泉巖頭より奔飛して碧潭に落、其形恰も數百の布を瀑
 すが如く、落る音颯沓として遠近に響き、凄冷しく、山嶺の蒼樹蒼鬱として、日光を遮ぎり、陰涼心
 に徹し、人をして毛骨凄然たらしむ、瀧の左の方に、瀧より南なり屏風岩とて、屏風を立廻したる如き數
 十丈の絶壁あり、又瀧の右に深さ六間、幅十六間、高サ七尺許の巖窟あり、上より水流る故に笠を